

準指・指導員をこれから受験する人に対しこんな質問を投げかけるのは少し気が引けるのですが、「皆さんにとって資格は本当に必要なのか？」ということです。

冬の間、スキースクールでインストラクターの仕事をしている人を除いて、雪なし県の指導員には資格を活かせる環境がないのが現状です。

新しいクラブ等で検定員がすぐにも必要な場合は別として、神奈川県の指導員は違うアプローチの仕方で資格を活用すべきだと思います。

スキーというジャンルにとらわれず、スノースポーツというもっと大きな視点で見れば、まだまだ雪を介して楽しめる場がたくさん持てるような気がします。アルペンスキー・ノルディック・スノーボード・フリーライド・クロスゲーム・歩くスキー・スノーシュー・バックカントリースキー等いろいろなかかわり方ができると思います。

その中でバックカントリースキーについてお話したいと思います。

基本的にはリフト等の動力手段を使わないで、自分の足でドロップポイントまで（滑り出す地点）ハイクアップ（登り）するのがバックカントリースキーです。当然リスクがつきものです。雪崩・ホワイトアウトによるルート消失など数え上げればきりがありません。最低限の装備（地図・コンパス）はもちろん場所によってはビーコン・スコップ・遭難者を探すゾンデも必要になります。

なぜそこまでして？と問われるかもしれませんが、バックカントリースキーがスキーの原点だと思われるからです。

八方のある人は「テーマパークで滑って（管理されて）どこが楽しいのだろう？」といてました（スクールの人なんですけどね）。

ハイシーズンでなくても、春には天候も安定し雄大な景色の中、素晴らしいスキーが楽しめます。

ぜひ一度体験してみてください。私の仲間は「このために技術を積み上げて来たんだな」といてました。スキーの価値観がきっと変わることでしょう。

最近のスキーヤーを見ているとカービング技術一辺倒で、浅いターンしかできない人を多く見かけます。スキーの性能があがったので、本人にはカービングターンをしていると錯覚しているような気がします。

基本的には「荷重・角付け・回旋」の3要素をバランスよく使うことでスキーの性能を導き出し、洗練されたカービングターンができると思います。

圧雪されたバーンでしか練習していないと、条件が変わったとき（コブ・深雪・悪雪・アイスバーン・クラスト）に全然滑れないスキーヤーになってしまいますよ。

ましてやバックカントリーにおいては山頂とふもとでは雪質も変化するし、自分の持っている技術を駆使しなければ通用しません。

初心者を教えるときに「さあ、カービングしましょう」とは言わないですね？
指導者は技術や指導法の引出しをたくさん持って、生徒個人に合わせたカリキュラムを
即座に使い分けなければならないと思います。

今回の講義で伝えたかったのは、技術やスキーというスポーツに対する考え方の
狭いスキーヤーになってほしくないということです。

いろいろな条件で滑ることにより自分の技術を上げ、生徒に対し一方的な指導に
ならないよう、スキーという道具を使えば様々な楽しみを見出せるような指導者に
ぜひなってください。

検定後に皆さんの素晴らしい笑顔が見られますように。